

## 限界状況における人間へのアプローチ

市川 裕

私は、大学三年のとき、法学部生ながら文学部の教室で後藤先生の「ヘブライ語入門」の講義に参加した。昭和49年（1974）年のことである。これには結構勇気がいった。予備知識ゼロも同然だったからである。当時、先生は四十代の前半だった

かと思う。その講義には、宗教学科の所属ではない学生が私を含め4、5人集まって、しかも、そのうちの二人は大学院生だった。講義の内容がどうだったのかは覚えていない。けれど、旧約聖書に興味を覚えて日も浅かった私は、この未知の言

語を学ぶことの喜びと不安に胸踊らせていたことだけは、記憶に鮮明である。その時は、将来、この道に進もうなどとは思ってもしなかったので、無味乾燥な法律の講義の合間の息抜きであり、ただ好きだから学んでいるという充実感に酔いしれていたのかもしれない。これが後藤先生との「なれそめ」であった。以来、予想だにできなかったほど長いお付き合いをさせて戴くことになって、今日に及んでいる。その間、ある年は一対一でハムラビ法典を読み、ある年は先生の在外研究のためオリエント文献を自習し、また恒例の旧約原典講読では「エレミヤ」を扱う期間が長かった。その他では「詩篇」と「箴言」を読んだ。ここからもわかるように、学部、大学院の講義、演習とも、文献学に重点が置かれていた。先生が実は聖書考古学を専攻していたという事実には照らしてみると、これはかえすがえすも残念なのである。

私は最近まで、オリエントの古代宗教や旧約の宗教と先史考古学や未開人の宗教とを関連づけて考えるという、今から見れば当然のことを、ほとんど考えもしなかった。視野が狭かったのである。確かに「学問は禁欲せよ」とは後藤先生の口癖であった。それを真に受けたわけでもあるまいが、「旧約学」なる膨大な文献資料の山を前にして、しばらくはわき目もふらず、研究書を読み漁っていた。そんな中で、旧約学と自分の学問的な興味との違いに気づいた私は、ユダヤ教研究へ向かった。後藤先生が不在中のことだったと記憶する。それから、もう十年以上がたった。遅きに失してはいるが、ここへきて、私は、人類にとって宗教とはなんであろう、ということを考え始めている。そうなると、先史時代から現代までを一応は視野に納めざるを得ない。このパースペクティブから人類史を俯瞰すると、驚くことには、オリエントの古代都市国家の成立という事態の重要性が圧倒的な力で迫ってくるのが感じられるのである。善きにつけ悪きにつけ、人類の「文明」が始まったのである。これを学問的に徹底的に解明するためには、宗教学は、人類学、文化人類学、先史考古学、歴史考古学、民族学などの関連諸科学の成果を取り入れつつ、総合的な判断を下せるだけの見識を養成しなければならない。そこで、再び後

藤先生なのである。

これまでの学問が文献学偏重であったのを残念に思うのは、今日のこのような学問の趨勢を思えばこそなのである。考古学のノウハウさえも教えてもらえなかったのはなんとも惜しいことをしたが、考古学をいかに宗教研究に結びつけるか、という点について、私は先生の講義の合間の「ついでの話」や雑誌から、学び盗むことができたように思う。それは、限界状況と人間の適応というテーマである。

後藤先生の学問の対象地域は、私見によれば、パレスティナと北歐であった。どこか、単に学問の対象という以上のものを感じるのである。前者は砂漠への人間の適応であり、後者は北極圏への人間の適応である。この話をするときには実にいきいきとしていたし、また何度もきかされた話である。そして、わかっていながら、その都度、新鮮であった。

まずは、パレスティナの考古学である。この方面では、二つのエピソードが印象的であった。ひとつは、ローマと戦って、断崖絶壁の壁面にできた洞窟に立て籠もって食料が尽きるまで抵抗したバルコホバの兵士とその家族たちのこと。先生自身、この洞窟調査に参加して、絶壁に垂らした縄ばしごを上り下りした体験をもつ。その時の写真をみると、考古学者の勇気もさることながら、二千年前、ここに立て籠もったユダヤ人の心情を思わないではいられないほど、生と死が交錯する場所である。もうひとつは、南部のネゲヴ地方の砂漠を舞台とした定住農耕の可能性の問題である。この地方は乾燥が激しく、微妙な雨量の差によって、農耕可能な地が変動する。かつてのパレスティナにも、このわずかな雨量と戦って農耕地を拡大しようとした人々がいた。荒野の真ん中にあるアヴダトという遺跡に残るナバテア人の貯水池と灌漑の遺溝に、その典型を見る。この古代人の夢をそのまま現代に応用して、砂漠を緑地に変えようとする試みが、既に20年も前から行われていると聞く。後藤先生ならずとも、胸が熱くなるような感動を覚えずにはいられない。

砂漠での人間の限界状況という問題関心を北に展開させたのが、北極圏に生活する人々の宗教と

限界状況だった。キリスト教の進出につれ、かつての神々は北の森へ追いやられたが、かれらは人間に悪戯をする奇怪な妖精として、今日まで生き続けているという。

「さかながうまいからノルウェーに行ったんだ」とは、先生の精一杯の照れ隠しである。私がムンクの作品に興味を覚えるようになったのも、先生のこうした関心をおいては考えられない。「叫び」

という作品にしても、「人間の山」といういくつかのスケッチにしても、その背後にパレスティナとは異質な北欧独特の生命観を思わずにはいられないのである。後藤先生の学問のなかでも、とりわけこの限界状況と宗教というテーマは、今後ますます重視さるべき課題なのではないか、と私は常日頃密かに確信している。